

昨年は、我が国最古の書物である『古事記』が編纂されて、ちょうど一千三百年目を迎えた記念すべき年でした。

関連図書が数多く出版され、神話に深い関わりのある地域においては各種のイベント等が開催されました。我が国における「事の始まり」について思いを馳せた方も多かったのではないのでしょうか。

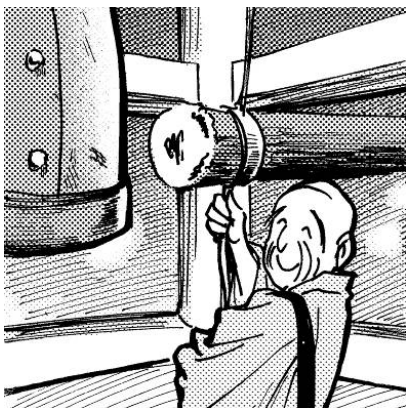
さて、『古事記』には、「伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）の二神（にしん）の結婚によって国生みがなされた」とのくだりがあります。現代的には、日本の国土・島々は夫婦によって生み出されたのだとの解釈が可能でしょう。

戦後間もない頃の日本は、世界に輸出できる資源や産業は、ほとんど無かった状況でしたが、国際社会の一員として、国民は何を基軸に生活を立て直さなければならぬかについて模索し続けることが否応なしに求められたのでした。

そのような現状に大憂を抱き、一人敢然と立ち上がったのが倫理研究所創設者の丸山敏雄だったのです。

敏雄は『夫婦道』という論文を起稿。そして「確かに、我が国は何も無くなってしまっただが、まだ、人が生きていて、夫婦が厳然として存在しているではないか。そうであるならば、日本の国の成り立ちが、岐美一神

## すべては夫婦の互敬 愛和から始まる



絵・今谷 鉄柱

（ぎみにしん）からであるように、戦後日本を、あらためて形作っていくのは、残された夫婦における互敬、そして愛和の生活からではないか」といった旨を、折にふれ強く訴えたのでした。倫理運動は『夫婦道』の論文起稿が出发点であるといえます。昭和二十年九月三日のことです。

倫理運動は有史以来、全国の会員における夫婦の心を一致させる一途な実践によって、和やかな家庭を築き、子供を立派に社会に送り出し、そして企業を健全な繁栄に導いてきました。

例えば、夫が「カラスは白だ」と言えば、妻は「たとえ黒く見えていても、白なのでしよう」と受けて立つ。すると夫は、「うん、やはりカラスは黒だ」と自然に改まる。

また、経営に明るくない妻に経営者が相談をして、「素人に何がわかる」と突っぱねると上手くいかず、「やはり、夫のことは良く知っている」と、妻の言い分を聞くこと好転する。やはりお互いが尊重し合っこそ、共に心が通い合うのです。

平成二十五年が幕を閉じました。一昨年の東日本大震災や、政局の変動による経済への影響が、ますます厳しくなると考えられます。打つ手は無限といわれます。まずは経営者として、夫婦が敬い合うことから一年をスタートさせてはいかがでしょうか。